中国短編集

彩霞万里

鳳　章

訳
上野　稔
上野しげ子

労働モラルの再発見！

新しい国造りに励む新中国、労働者たちの自己犠牲と遅れた者への援助など、新しい労働モラルが、ユーモラスな筆致で、感動的に謳いあげられている！

中国語学舎出版部　￥980

彩霞万里

鳳　章

訳

上野　稔

上野しげ子

中国語学舎出版部刊

中国短編集
彩霞万里
定価　九八〇円
昭和五十一年十一月二十日　印刷
昭和五十一年十二月十日　発行
著　者　鳳　章
訳　者　上野　稔
　　上野しげ子
発行人　上野しげ子
発行所　中国語学舎出版部
　　東京都小金井市前原町三―四〇―一
印　刷　東京ベル印刷
製　本　小泉製本

まえがき

本書は一九七三年九月に妻しげ子が訪中した際、北京で購入した二十冊ほどの小説の中の一冊である。

私が同一著者、鳳章氏の短編からなる「彩霞万里」の翻訳を思い立ったのは、著者の軽妙かつユーモーラスな筆致にひきつけられて一気かせいに読了し、新中国に馴染みの薄い日本人にとっても非常に読み易い中国小説の一つであると考えたためである。

新中国は一九四五年八月の抗日戦争の終結に引き続く、五年間にわたる国民党との国内戦を経て、四九年十月一日の中華人民共和国政府の成立によって誕生したが、翌五〇年六月以来三年半にわたる朝鮮戦争の鉄火の試練を受けるなど多難な揺らん期を経験している。

本書は以上の時期に引き続く、国をあげて建設の意気に燃え立った〝偉大な時代〟――一九五〇年代の江南の各種工場、農村を舞台にして、それぞれの仕事にこんしんの情熱を傾けている老若男女労働者のひたむきな姿を、ユーモアを交えて生き生きと描き出している。

新中国の小説は一九四二年五月の毛沢東主席の延安文芸講話で明らかなように、革命に奉仕し、勤労大衆に奉仕することを至上の目標とし、その上、芸術性があり、面白いことが要求され

ている。

これは文学に対する極めて難かしい注文であると思われるが、以上の文芸路線を具現することに見事に成功した、数少ない中国小説の中の一冊が本書であると私は確信している。

その上、本書は短編集であるために日本の読者にとって入り易く、かつ新中国についての肩のこらない手引書になるはずである。

本書の翻訳は七四年に仕上げたが、なかなか出版の機会がなく、このたびやっと日の目を見ることができたことは望外の幸せである。

本書が広く読まれ、新中国の理解に役立つとともに、日中友好の一助となることを祈ってやまない。

なお翻訳に当って鄭国基先生のご教示を受けたほか、妻しげ子の協力を得、また編集、出版については二十年来の畏友、前毎日新聞社出版局第二図書編集部長、島崎千秋氏の懇切なご指導、ご協力を頂いたことに対し、心からの謝意を表します。

一九七六年六月

上野　稔

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

中国短編集

彩霞（あやけ）万里／目次

まえがき

老いたる細工人の物語……9
彩霞万里……41
秘密……67
夜の客……85
穆瑞珍……101
師を改めて拝す……117
葉師傅……135
あと十日ある……153

革新者の肖像画……165
陽気な師傅……181
六十五夜……193
受付の法おじさん……211
茶畠にて……233
あとがき

中国短編集

彩霞万里

鳳章

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.c

老いたる細工人の物語

一

このような工場がある——高々と聳え立つ煙突もなく、きちんと整った作業場もない、またゴーゴーと鳴り響くモーターの騒音も聞えない。あなたが門口を通り過ぎる時、一見ごくありふれた、住宅だと思うだろう。しかし一歩門の中に入ると、元気一杯の顔を真赤にした人々が、仕事をしているのが目に入る。そして、耳に快よいトンカチを叩く音、やすり、のみを使うリズミカルな音、威勢のよいふいごの音、これらの音のほかに時たま、旋盤の回転音が耳に入ってくる。中国では、このような小さな工場が、まだ少なくない。この小説の主人公である老銅細工人と老銀細工人も、こんな工場で仕事をしているのである。

老銅細工人は、金勝富（チンションフ）といい今年五十六才で、びんの髪の垂れている部分から、下あご、そして下あごから、のどぼとけの上まで、針金のように硬い、短い剛毛でぎっしりおおわれていた。彼は子供が非常に好きで、彼が細工道具を入れたかつぎ荷を肩にして、町を流していると、いつも一群のいたずらっ子たちが、彼にまつわりつき、かつぎ荷につけた客寄せの銅片が、チャランチャランと鳴るのにつれて、その後で走ったり、笑ったり、いたずらしたりしていた。

彼がお客に呼び止められて、荷をおろしてやかん、足あぶり、水煙管の修理に取りかかると、子供たちもそこにすわりこみ、おとなしく好奇心に溢れた目で、仕事をするのをじっと見つめていた。仕

事が終わると、彼は腰を伸ばし、腕を振り、それから子供をからかい始める。時には手あたり次第子供を抱きしめて、子供の顔に自分の顔を近づけてやる。ひげが子供のリンゴのような頬にぶつかると、子供は大声を出し、足をふんばったり、蹴っとばしたりし、身をよじって、彼の腕の中から飛び出して逃げて行く。他の子供たちも四方八方に逃げ散り、遠く塀の角などで「ひげ親父、親父ひげ、顔に当ると針のよう！」とはやし立て、彼を大笑いさせる。このように、子供たちがはやし立てるお蔭で、彼の〝ひげ親父〟のあだ名は、広く街中に伝わってしまった。

一方、老銀細工人は、謝宝安（シェパオアン）といって、老銅細工人と同年齢であるが、彼の方が半ヵ月早い生まれなので、銅細工人は謝宝安を〝宝安兄貴〟と呼んでいる。二人は二十年ほど前に知り合いになった。その頃、銀細工人は、やっと三十才を過ぎたばかりで、南浩街の金文字の看板が古くて黒ずんだ、天福銀楼（銀細工店）で仕事をしていた。彼はいつも売場の、脚の高い腰掛にすわり、熔接燈と向い合って、首飾などの金銀細工物をハンダ付けしていた。その頃彼は、ひげの銅細工人が商売道具をいれたかつぎ荷を肩に、店先をチャランチャラン音を立てながら通り過ぎるのをいつも見かけていたが、まだ知り合いにはなっていなかった。二人が相知るようになったのは、ずっと後になってからである。

ある時、銀楼の主人が妹婿の家に、赤ん坊の出産満一ヵ月目の祝いに招かれ、帰途、宝石箱の鍵をなくした。主人はすっかりあわててしまった。というのは、宝石箱にはお客に頼まれて加工した、金銀の首飾が入っており、もしお客が取りに来て渡すことができなければ、店の信用にかかわるからである。たまたまその宝石箱には七重に厳重に錠前をかけていた。店の主人は四、五人の銅細工人を、

立て続けに呼んだが、誰も開けることができず、最後に流しの銅細工人の金勝富に頼んだ。

このひげの銅細工人は、ただ黙って宝石箱を両手で抱きかかえて、ややしばらく仔細に調べたあと、二本の針金で鍵穴をほじくっていると、半時間もしないうちに七重の錠前がぱっと開いた。

店の主人は目を丸くして、何度も頭をぺこぺこ下げて「助かったよ、有難う、有難う、凄い腕を持っているんだね！」とお世辞をいった。

銅細工人は軽く笑いながら、何もいわずに金を受取り、かつぎ荷を肩にして立ち去った。このいきさつの始終を、銀細工人の謝宝安は見ており、心中、彼の腕前に舌を巻いた。

このことがあってから、謝宝安が店先で手があいている時、金勝富がかつぎ荷を肩にして、店先を通りかかるのを見かけると、呼び止めて世間話をするようになった。そして炎天の日、金勝富が顔中を汗にして、荷をかついで通りかかると、店内に引っぱり入れて涼を取らせ、水をふるまったりした。金勝富の方も気兼なく、喜んでこの穏やかな銀細工人と付合っていた。ある日、俄雨にあい金勝富が荷を銀楼の軒先において、雨宿りをしている時に、銀細工人の謝宝安が仕事をしているのを見て、彼の技術の巧みさに驚き、感服した。

以前、江南の人々は子供が生後、満一ヵ月になった時に、子供の胸に〝延寿袋〟（長命ブローチ――銅あるいは銀で銀貨大の袋（ロケット）を作り、袋の中にミニチュアの筆、硯、本、はさみ、算盤などを入れる）を掛け、子供が将来、平穏無事で勉強し、役人になり、金持になることを祈る習わしがある。そして〝延寿袋〟は、銀楼内でも特に腕のよい師傅（熟練工）が作ることになっていた。謝宝安はこの延寿袋を作れるだけでなく、

誰にもまして小さく巧みに作った。彼の作った延寿袋は僅か銅貨大で、袋の中の筆や筆入れは出し入れができ、算盤の玉は、ひとつひとつはじくことができ、袋の底の網目は絹糸で織ったように細いばかりでなく、二重になっていた。銅細工人の金勝富は、その精巧な出来栄えに感嘆して「宝安兄貴、あんたがこんなに精巧な仕事ができるとは思いもよらなかったよ！　まさかあんたの指の先に、目がついているんじゃあるまいね？」

「お前さんは二本の針金で、七重になっている錠前さえ開けたんだから、お前さんの方こそ、指先にも目がついているんじゃないのかえ？」と銀細工人は応酬し、二人は声を合わせて笑った。

銀細工人は友人と付合う時はとても穏やかだったが、銀楼の主人とは生れながらの仇同士のようにうまが合わず、しょっちゅう、いがみ合っていた。主人の吝嗇（りんしょく）、偽瞞性、狡猾などのすべてが彼は気に入らなかったのである。銀細工人の気性は激しく、ひとたび怒ると、十匹の水牛でもそれを抑えることができない。ある時彼は、主人のおかみさんといい争い、怒って早速荷物をまとめて、その店を飛び出し、北街の小さな銀細工店で、仕事をすることになった。それでひげの銀細工人も以来よく、北街まで足を伸ばすようになった。

このようにしてまた何年か過ぎ去った。ある日、銀細工人がふと、ひげの銅細工人が最近さっぱり寄りつかなくなったことに気がついた。彼はいぶかしく思うとともに、懐かしさも手伝って、いろいろ手を尽して問い合わせたところ、保長（千戸を管理する長）がひげの銅細工人を軍夫として、無理やり徴用しようとしたので、銅細工人は、大事な商売道具の入っているかつぎ荷も置きざりにしたまま、

行方をくらましたことが分かった。銀細工人はこれを知って肉親を失なったように悲しんだ。彼はその後も毎日店頭で背を丸くして熔接燈に向い、金銀の器を熔接したりしていたが、銅細工人の金勝富が店先を通り過ぎる時響かせていたチャランチャランという音が、いつも聞えてくるような気がしていた。

一九四六、七年になると、国民党政府支配地区の経済状態は日に日に悪くなり、銀楼は金銀の延棒や袁大頭（清朝が打倒された後の第一代大総統である袁世凱の顔を刻んだ銀貨）を鋳造して、売り買いするのに忙しくなった。このため、銀細工人の本来のぎりょうを必要とする仕事が、だんだん少なくなり、せいぜい金銀をはめ込むといった見習工でもできる簡単な仕事しかなくなった。そこで銀楼の主人たちはいの一番に、腕のいい月給の高い老師傅たちをくびにした。

謝宝安は骨のある男なので、くびをいい渡されると、一言も文句をいわず、最後のわずかばかりの給金を受取ると、家に帰って老妻に当座の用に手渡した。彼は老妻から藍色の大風呂敷を受取ると、その中に着替えの下着のほか、銀細工用の熔接燈と小さいトンカチ、やっとこ、のみを入れて包んだ。彼は腕一本を頼りに、田舎に行って村や町を流し歩き、結婚間近い村娘のために首飾などの装飾品を作ってやり、手間賃を稼ごうと考えたのである。田舎に行った当初は、仕事もいくらかあったが、田舎の国民党政府側の保長、甲長（百戸の長）、土豪、盗賊の手先、税検問所の下っぱ役人などがハエのように彼に群がって、所得税、営業税、保安税、通行税などいろいろな名目で、彼が折角稼いだ金のほとんどを巻き上げてしまい、手元に残った僅かばかりの金では、飯も満足に食えない状態になった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com